



持続可能なコミュニティを 目指せ

兵庫県豊岡市では、コウノトリを呼び戻すため、コウノトリ農業戦略会議を開いています。コウノトリが絶滅した原因の1つは、農業の普及です。そして、もう1つの原因は、農作業の効率化のため、農地改良が行われ、湿田が大幅に減少したことがあげられます。それに伴い、ドジョウやタニシなどの鳥の餌となる生き物が越冬出来ず、激減したことにより、コウノトリは絶滅しました。

そこで、コウノトリを野生復帰させるため、豊岡市では100年計画を作り、種子の熱湯消毒や農薬を使用しない除草等、無農薬化を図るとともに、冬季湛水、早期湛水、中干し

の延期等、コウノトリの餌となる生き物を育む環境を整えるように、農家に働きかけました。その取り組みにより、今では豊岡市にコウノトリが戻り、そのコウノトリを見に観光客が年間32万人も訪れています。

また、このコウノトリを野生復帰させる取り組みは学校教育の素材にもなります。無農薬の農家の協力を得て、子どもたちが米作りの体験もしていますが、東日本大震災後には、子どもたちが豊岡市の米を被災地に送りたいと市長に提案しました。ただ、お米を送るのにかかるお金をどうするのかということで、子どもたちが宅配会社とJAに事情を説明しに行くと、子どもたちがわざわざ来たのだからと、送料は宅配会社が、パック代はJAが負担してくれることになりました。子どもたちは本当にすごい力を持っています。それを活かすことができるかは、大人たちが子どもたちに何を示すことができるかというところにかかっています。子どもたちが誇りを持てるような取り組みを行えば、その取り組みが結果的に地域を盛り上げ、観光客を呼び込み、まちを良くします。



column 4 地元の「プロ」を活かした仕組みづくりを

島根県山間地にあるJA雲南は市町村合併により高齢者のおじいちゃんおばあちゃんが取り残されてしまいました。そのため、昔は各村に1人はいたJAの農業指導員も、今は10市町村に1人しかいません。

そこで、地元の野菜作りが上手な高齢者を指導員として認定することにしました。地元には各分野のプロフェッショナルがいます。そういう人たちを1人1人引っ張り出して指導員とすることで、地域に知恵を繋いでいく仕組みをつくりました。



column 5 役所と民間のズレがきっかけで生まれた小説



高知県出身の「阪急電車」「フリーター、家を買う」の著者として有名な有川浩さんが「県庁おもてなし課」という小説を出しているのはご存じでしょうか。おもてなし課は高知県に実在します。有川さんはそのおもてなし課からの依頼で、現在、観光特使に着任していますが、着任するまでには「観光特使とは何をするのか」と質問すると、「名刺を配ってくれば、それだけでいい」という答えが返ってきたり、名刺をつくるのに1カ月以上もかかり、その間も音沙汰がなかったり、役所と民間のズレを感じる場面がたくさんあったそうです。そのエピソードをもとに書いたのが「県庁おもてなし課」という小説というわけです。

この小説は20万部のベストセラーになり、今、小説を読んだ人が「本当におもてなし課ってあるんですか？」と高知県を訪れています。



地域の力を引き出す5つの法則



今回、金丸弘美さんには全国各地の事例をご紹介いただきました。事例を見ると、地元のことをよく知り、地元が元々持っている良いもの上手に見つけることができたところが元気になっていることが分かります。そして、それを継続的なものにするために、展望を持ち、地域の素材について熟知し、持続可能な仕組み作りを行っています。そこには、まさに5つの法則が当てはまっています。みなさんの地域でも「地域の力を引き出す5つの法則」を実践してみたいかがでしょうか。